

論文の要旨

論文題目	若者の友人宛パソコンメールにおける文体の混用
氏名	跡部 千絵美
学位	博士(文学)
授与年月日	平成21年2月27日

0. はじめに

文体の混用はスピーチレベルシフトとしてこれまで盛んに研究されてきた。しかしメールをデータとしたものはなく、メールの文体の切り替えには先行研究で説明できないものが含まれていた。そこで本研究では、メールに見られる文体の混用について詳細を明らかにするため、分析を行った。

分析は以下の手順で行った。まずスピーチレベルシフトに関する先行研究の分析結果を参考に、スピーチレベルシフトを“心的距離の変化を示しうるダ体とデスマス体の切り替え”と定義した。そして心的距離の変化を示す文をスピーチレベルシフトの観点から分析し、その後心的距離の変化を示さない文について文体選択の要因を分析することとした。研究課題は以下の3点である。

- ・メールにおける文体及びスピーチレベルの量的特徴を明らかにする。
- ・スピーチレベルシフトした文の特徴を明らかにする。
- ・心的距離の変化を示さない文体の切り替えについて、文体選択の要因を明らかにする。

1. スピーチレベル認定基準作成

スピーチレベルシフトを分析するため、心的距離と関わる文を取り出す必要があった。しかし先行研究の多くが採用している分類方法では、取り出すことができなかった。そこで本研究では、スピーチレベル認定基準を新たに作成した。心的距離の変化を示すスピーチレベルシフトを明らかにするため、次の通りにスピーチレベルの認定を行った。

まず心的距離と関わる文を(1)終助詞、(2)対人的モダリティ、(3)挨拶文により取り出し、それらについてスピーチレベルの認定を行うこととした。文体がダ体かデスマス体かによりそれぞれ -レベル あるいは +レベル に認定した。それぞれの数は、-レベル 1483文、+レベル 422文であった。

2. 分析の結果

・文体及びスピーチレベルの量的特徴

まず本研究のデータとなったメールの、文体、スピーチレベル等について量的特徴を明らかにするべく分析を行った。

データに含まれる文は、全部で4630文ある。文体の観点から調査した結果、以下の3点が明らかになった。

データ全体としてダ体が最も多いが、デスマス体も26.5%見られる。

約85%のメールでは、ダ体とデスマス体が両方見られる。

40%以上60%未満、つまりほぼ同じ割合のメールも15.8%見られる。どちらの文体も20%以上80%未満であるメールは全体の約45%である。

また会話をデータとする先行研究と比較すると、本研究のデータの量的な特徴としては、ダ体とデスマス体が同程度用いられるメールが存在するということがあげられる。

スピーチレベルの観点からは、以下の3点が明らかになった。

a) データ全体としては -レベル の文の割合が32%で最も高い。

b) スピーチレベルを持たないダ体及びスピーチレベルを持たないデスマス体が、合計31.7%含まれている。

c) -レベル と +レベル の使用をメールごとに見ると、いずれかのスピーチレベルしか現れないメールは48.9%と約半数である。

さらに心的距離の変化を示さないダ体及びデスマス体の多くが、裸の文末形式であることを示した。

・スピーチレベルシフトされた文の特徴

スピーチレベルシフトを分析するためには、各メールの基調スピーチレベルを明らかにする必要がある。本研究では基調スピーチレベルの認定を、筆者を含めた3名の日本語母語話者の判断により行った。3名の判断が一致したもののみについて、基調スピーチレベルを認定する。その結果、129通のメールのうち105通について判断が一致した。内訳は -基調 84通、+基調 19通、基調複数 2通である。なお判断が一致しなかった24通には、年賀のメールや、依頼のメールで +レベル が多く用いられているものが含まれていた。

分析対象とするのは、スピーチレベルシフトされた文、すなわち -基調 のメールにおける +レベル の文、及び +基調 のメールにおける -レベル の文である。分析の観点からは、(1)ポライトネス、(2)手紙あるいは日常会話との類似、(3)文の従属度とした。

(1)ポライトネスに関して、-基調 のメールに見られる +レベル の中には、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーと、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが見られた。ネガティブ・ポライトネス・ストラテジーは、行為要求をする際に相手に敬意を示し、負担の補償をしていると捉えられるものである。ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーは、丁寧すぎる表現によるユーモアと、借り物スタイルの使用であった。また +基調 のメールに見られる -レベル の中でも、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーが見られた。具体的には相手と接近するためのストラテジーのほかに、借り物スタイルも見られた。

(2)の +レベル の手紙との類似点とは、近況を述べたり尋ねたりする文に +レベル が見られるという点である。また -レベル と日常会話の類似点とは、率直な感情を表すも

の、決まり文句に、対面会話時に使用している - レベル が用いられるという点である。

(3)文の従属度に関して、+レベル には前のダ体に従属されている文が見られた。また - レベル の助詞+終助詞で終わる文は、前のデスマス体に従属するものであった。

今回の分析結果をこれまでの先行研究に照らしあわせると、ポライトネスに関しては会話をデータとするスピーチレベルシフトの先行研究で指摘されていたのと同様の結果となった。手紙あるいは日常会話との類似については、田中(2001)による意識調査で、メールと手紙が類似したものと捉えられていることが明らかになっていたが、言語形式の点でも手紙のレジスターの影響を受けていると考えられるメールがあることが明らかになった。またスピーチレベルシフトの先行研究で意見が分かっていた談話展開機能については、全てのデスマス体に談話を展開させる“機能”があるわけではないが、一部の +レベル に文章をまとめる効果があるということを指摘した。

・スピーチレベルシフトを持たない文の文体の選択要因

上でスピーチレベルを持たない文体の多くが裸の文末形式であることを示した。そこで裸の文末形式における文体選択の要因を分析した。分析対象は、裸のダ体312文、裸のデスマス体469文、合計781文である。

裸の文末形式には、もう一方の文体に置き換えたときに違和感が生じるものと、生じないものがある。この点について、11名の日本語母語話者にアンケート調査を行い、置き換えたときの違和感の判定を行った。その結果、文体を置き換えたときに強い違和感が生じるのは、裸のダ体13文、裸のデスマス体154文であった。またほとんど違和感が生じないのは、裸のダ体250文、裸のデスマス体148文であった。まず、文体の置き換えができないものについて、(1)相手意識、(2)手紙あるいは日常会話との類似、(3)文の従属度の3つの観点から、違和感が生じる文の特徴を明らかにするべく分析を行った。

(1)の相手意識については、裸のダ体にはa.心話文、b.述部の繰り返しが見られ、裸のデスマス体にはメタ言語の文が見られた。(2)について、前後の文が全てデスマス体のとき、文体の統一のために裸のデスマス体が選択されていると考えられる。

次に文体の置き換えが可能な場合に、実際にはなぜ一方の文体が選択されたのか、その要因を探った。その結果、裸のダ体が選ばれた文の特徴として、)補足する文、)語気を強めた文、)独り言的な文、そして(3)であげた従属的な文があることが明らかになった。こうした表記上の特徴は、メールをデータとした本研究で初めて明らかになった点であるが、先行研究の指摘と重なる点である。

また文体の置き換えができる裸のダ体の一部と裸のデスマス体の全てについて、文体選択につながる文の特徴は明らかにならなかった。これらはいずれの文体でも不自然ではないが、読んだときの印象が異なる。裸のダ体より裸のデスマス体のほうが、より相手意識が高い印象を与え、逆に言えば裸のダ体のほうがより独話に近い文だという印象を与える。また裸のデスマス体の文は、その前のダ体の文のまとめになっているように捉えられる。

裸のデスマス体で文の特徴が明らかにならないということから、裸のデスマス体が + 基調のメールだけではなく、- 基調のメールにおいても、主な文体として用いられていると考えられる。つまりメールにおいて、裸のダ体は + 基調のメールの中の有標であるが、裸のデスマス体は + 基調のメールにおいても - 基調のメールにおいても無標ということである。これは次のようにまとめられる。

図1. メールにおける2種類のレジスター

+ 基調レジスター

主な言語形式：デスマス体（+レベル，裸のデスマス体など）

文体不明（名詞止め，感動詞など）

限定的に用いられる言語形式：- レベル，裸のダ体

- 基調レジスター

主な言語形式：ダ体（- レベル，裸のダ体など）

文体不明（名詞止め，感動詞など）

裸のデスマス体

限定的に用いられる言語形式：+ レベル

このレジスターは、メールだけでなく他の CMC にも当てはまる可能性が高い。この点については今後、ブログ、BBS、チャット等をデータに分析していきたい。